



左から米山はる、長女 愛子、次女 澄子

青山学院緑岡幼稚園第三回生
(前列中央米山はる園長)

下土狩別邸の庭園(右が離れ茶室)

米山梅吉記念館

館報

秋号

2026 Vol.48

米山はるは、明治7年1月長泉村上土狩の何代か庄屋を務めた家に生れた。父は明治維新の際、村で一番最初に丁髷を切り落としたといわれる新しいことを好んだ人物だった。金婚式を前に梅吉は亡くなったが、家庭生活におけるはる夫人の内助の功は大きなものだった。

梅吉とはる夫人の性格は、是非をわきまえる心、自分の信念を貫くことなどよく似ていた。一方梅吉と対照的に、はる夫人は社交性に乏しく、賑やかな場に出ることを好まず、話下手であった。自分の健康に関心な梅吉と異なり、健康に関しては神経質すぎるくらい気を使っていた。梅吉は、はる夫人や娘たちに和歌に親しんでほしいと佐佐木信綱を師として学ばせようとしたが、はる夫人はそのたびに苦心していた。しかし茶道を好み、雨の日など一人茶室にこもって、静かにお釜のたぎる音に聞き入り、梅吉も寸暇を割いて共に静けさにひたることもあった。

「物事の判断はすべて自分の判断で処理する」「何事をするにも全心を込める」「恥を知れ」と娘たちの躰には特に厳しく、女中さんが心配するほどであった。緑岡幼稚園設立時には、経験深く信頼のおける人を主任に選び、幼い子どもたちと一緒に園長として過ごした。終戦後、農地改革により乳母日傘で育てられた時代には想像だにできなかった立場になったが、明治・大正・昭和の時代を生き抜いた。

国際ロータリーでも女性の会長が選出されるようになり、日本にも女性の首相が誕生した。明治19年生まれの平塚らいてう曰く「原始、女性は実に太陽であった」。陰に日向に、いつの時代も女性の存在は大きい。